

形容詞の換喩的多義性

月 足 亜由美

Metonymic Polysemies of Adjectives

TSUKIASHI Ayumi

Abstract : This paper discusses the Adjective + Noun (AN) phrases in which the relations of adjectives and nouns are considered indirect. These kinds of ANs have been explained by classifying and paraphrasing in a variety of ways. However, ANs are verbalized in such flexible and unique ways that paraphrasing ANs is sometimes extremely complicated or even impossible. Analyses in the framework of traditional grammars and linguistic works are outlined in Section 2. In Section 3 and 4, by looking at the examples of the adjectives *old* and *quick*, it will be shown that flexible use and meanings of ANs result from the metonymic polysemies of adjectives, which are caused by the different profiles in the same cognitive domain.

1. 序

限定用法 (attributive use) の形容詞には名詞を直接的に特徴づけるものと、そうではなく名詞といわば間接的な関係を持つものがある。例えば *a small child* というとき、「個としての子ども」に言及してその特徴を述べているのに対し、*a mere child* という例は「子どもであること」という *child* の指示内容を強調した言い方 (斎藤ほか 1984 : 79) で、Bolinger (1967) はそれぞれを「指示物修飾 (referent modification)」, 「指示修飾 (reference modification)」と呼んでいる。前者は関係詞節や *be* + adjective で言い換えられる、つまり叙述用法 (predicative use) で同じ内容を表すことができるのに対し、後者はそれができないという違いがある。

- (1) a. a child who is small The child is small.
b.* a child who is mere *The child is mere.

次節以降でみるように、指示修飾の AN はそれぞれに異なる多様な意味を持つ。本稿はこの指示修飾を含めた「形容詞 + 名詞 (Adjective + Noun : 以下 AN)」の表す意味が多岐にわたることを示し、その分析において名詞が指す対象の意味を考慮する必要があること、また形容詞の意味については、対象と知覚者 (概念化者) との相互作用に基づく関係から形容詞の換喩的な多義性が生じることを論じる。

まず次節で指示修飾に対する文法書などでの説明を概観し、名詞の意味の重要性を論じた Taylor (1992) の *old* についての分析を 3 節でみる。4 節では形容詞が表す対象の属性・性質といわれて来たものを、知覚者と対象との相互作用により生じる「相互作用の性質」とする最近の研究 (篠原 (2002, 2008), 西村 (2002) など) の考え方が、*quick* などの例にも適用できることをみる。

2. AN の下位分類の試み

形容詞をその意味や用法によって分類する試みはこれまで文法書などで広く行われており、用語も様々である。例えば Quirk et al. (1972: 435) は名詞の指示物を直接的に特徴づける形容詞を *inherent adjective* (内在的形容詞)、そうでないものを *noninherent adjective* (非内在的形容詞) と呼んでいる。Jespersen (1961, 1965) は前者の AN 構造を直接的関係 (*direct relation*)、後者を間接的関係 (*indirect relation*) とし、それをさらに下位分類している。ここでは便宜上、Bolinger (1967) の「指示物修飾」「指示修飾」という用語を使うことにする。

形容詞によって指示物修飾または指示修飾のみにしか使えないということはまれで、多くの形容詞は両方の用法を持つ。

- (2) a. a *firm* handshake a *firm* friend
 b. a *perfect* alibi a *perfect* stranger
 c. a *certain* result a *certain* winner
 d. a *true* report a *true* scholar
- (Quirk et al. 1972: 436)

Quirk et al. は、各ペアの右側の指示修飾においては、それぞれの名詞の基本的意味が拡張されていると説明している。*a firm friend* はある個人を指してその人が「堅い」ということではなく、「堅い」友情で結ばれた友人という意味である。*a perfect stranger* はパラフレーズすれば “a stranger who is perfectly strange” というように、概念化者がその人を「知らない」度合いが完全だということになる。

AN によっては同時に両方の読みを持つ場合がある。Vendler (1968: 88) の *a beautiful dancer* が有名な例であるが、これは “a dancer who is beautiful” と “a dancer who dances beautifully” という二つの意味を持つ。

以下で、指示修飾の下位分類を概観してみよう。まず、前節の (1 b) でみた *mere* は強意語 (*intensifier*) としての働きをするもので、名詞の意味を強調している。*a mere child* は *merely a child* というように副詞を用いてパラフレーズできるとしばしば説明される (斎藤ほか 1984: 79)。(2) の *a perfect stranger*, *a true scholar* も同様の例である。

また、*a good father* や *a weak king* のように、*someone who is good as a father, weak as a king* とパラフレーズできる例もよく知られている。その名詞としての属性を表すもので、良い父親であるが、人としても好人物であるかどうかはわからない。指示物修飾の例えば *a red balloon* という例で、*a red object* というように名詞を上位語にしてもその形容詞が表す属性は保持されるが、*a good father* の *father* を上位語に置き換えて *a good man* とした場合、*good* という属性が保持される保証はない。

次に *a beautiful dancer* のような、名詞が動作主名詞化形¹⁾ (*agentive nominal*, *derived nominal*) のものと考えてみよう。“a dancer who dances beautifully” とパラフレーズできることからわかるように、その名詞のもととなる動詞 (*dance*) の様態がどうであるかということを表している。Vendler (1968: 89) は “... the adjective is not ascribed to the subject absolutely, but only with respect to a verb which is morphologically recoverable from a noun ascribed to the same subject” と説明している。同様の例として、*a fast runner*, *a slow speaker*, *a light sleeper*, *an early riser* などがある²⁾。

名詞が動作主名詞化形でない場合は、形態的にもととなる動詞が明示的でないため、どんな動詞で表される活動の様態を特徴づけているのか、それぞれの AN で考える必要がある。例えば *a just king* は *a king who rules justly*, *a fast horse* は *a horse which runs fast* というように、その名詞の活動とそれを表す動詞が典型的には一つに

1) 安井ほか (1976) の用語である。

2) *an early riser* において許される形容詞は *early* のみ、つまり副詞に対応する形容詞であり、また、*early* を省略して **an riser* というのは許容されない。安井ほか (1976) は、これらの動作主名詞化形が動詞的性質をかなり強く保持しており、名詞らしさの度合いが低いことを指摘している (安井ほか 1976: 192)。ただし、**a sleeper* も許容されないものの、*a runner*, *a speaker* は可能であり、その度合いには違いが見られる。

特定され、*a fast horse* において「走るのが速い馬」以外の解釈はほとんど考えられない。一方、*a careful scientist* という例では、その *scientist* は *observe, perform experiments, reason, write* といった複数の動詞によって表される一連の活動を行っている (Vendler 1968: 92)。このようにパラフレーズによってその成り立ちを示すと、複数の動詞を必要とする AN のほうが多い。同じく Vendler の例である *a difficult language* は *a language that is difficult to learn, speak, write or understand* という解釈が考えられ、何が難しいかということが複数の動詞で示される (Vendler 1968: 97)。さらに、その名詞 (*language*) は一連の動詞の目的語であり、*a careful scientist* のような主語 (動作主) の例とはその点で異なる。名詞が目的語の例はほかに *an easy problem* (= *an easy problem to solve*), *a comfortable chair* (= *a comfortable chair to sit on*) などが挙げられる。

AN の意味をパラフレーズすることによって考えると、ここまで挙げたものは、2 番目の *a good father* を除き、それぞれの副詞形が何らかの方で使われている。

a mere child = *a child who is merely a child*

a good father = *someone who is good as a father*

a beautiful dancer = *a dancer who dances beautifully*

a careful scientist = *a scientist who carefully observes, perform experiences, reasons, or writes, etc.*

ほかの例を見てみると、さらに別の方法でパラフレーズしなければならない例が存在する。

(3) *a sick room* (Jespersen 1961, 1965: 301)

(4) *nuclear scientist* = *scientist who [studies] nuclear [phenomena]* (Vendler 1968: 101)

(3) はパラフレーズするなら *a room for the sick* となり、*dining room* や *bedroom* のような複合名詞と同程度に形容詞と名詞の意味の圧縮度が高い例といえる (安井ほか 1976: 180)。意味の圧縮度ということ言えば (4) も同様に高いが、このようにパラフレーズして考えてみると、結局 AN というのは (パラフレーズによって表すことのできる) 意図する意味の中から、意味の重要性・関連性が最も高い要素を拾い上げて言語化したものである。Vendler (1968: 100) には “... AN may be the result of a deletion of redundant elements.” とある。

(5) *He was now smoking a sad cigarette.*

= *He was now sadly smoking a cigarette.* (安井ほか 1976: 177)

安井ほか (1976) の説明にもあるように、(5) はパラフレーズが非常に複雑になる例であるが、表面的な形式と意図されている意味との間にはいくつかの中間段階 (*He was sad.* + *He was smoking a cigarette.* → *He was sadly smoking a cigarette.* → *He was smoking a sad cigarette.*) が介在しており、この AN も非常に意味的に圧縮された表現だといえる。

AN をパラフレーズすることによってどんな種類があるのか見てきたが、私たちの言語化の仕方が非常に柔軟であるため、この方法での下位分類は困難である。*a beautiful dancer* のように *dance* という特定の動詞 + 副詞で言い換えられる例もあるが、複数の動詞が関わるものなど、パラフレーズが複雑であったり、後でみるように不可能な例さえある (安井ほか 1976: 176)。このような AN の多様性・柔軟性は、強い合成原理 (*compositionality principle*) に対する反例の一つである。つまり、複合表現 (AN) 全体の意味は、それを構成する部分の単純な総和であるとするとはできない。AN の多義性は形容詞の多義性から出るものなのか、それとも名詞の多義性から生じるものなのだろうか。これについて、Taylor (1992) の *old N* の分析をみてみよう。

3. Taylor (1992) の *old problems*

Taylor (1992) は形容詞の 2 つの用法をそれぞれ “absolute sense” と “synthetic sense” と呼んでいる。absolute sense とは、*a red house* のように、その AN の意味が各構成要素の単純な総和として導き出せる場合の形容詞のことである。これに対し synthetic sense とは、AN の意味が名詞の意味と形容詞の意味との「微妙な相互作用 (sub-

tle interaction)」から生じるもので、例として *a fake Picasso* や *a mere child* を挙げている (Taylor 1992: 1-2)。

分析の対象としている *old* にはこれら両方の用法があり、*an old friend* という AN は absolute reading では「年輩の友人 (a friend who is advanced in years)」, synthetic reading では「長い付き合いのある友人 (someone who has been a friend for a long time, i.e., a friend of long standing)」という意味になる。Taylor は結論として、*an old friend* の多義性は形容詞 *old* の多義性ではなく、名詞 *friend* の多義性から生じているとする。absolute reading の場合は *friend* が指示するのはその個人であり、「(私の友人である) その人が年をとっている」という意味である。これに対し、synthetic reading の場合の *friend* は、「私」との長い友人関係における参与者としての人物を指している。つまり、*friend* の関係的性質 (relational character) が AN の意味に影響するのである。引用を見ておこう。

That *old friend* has two readings, i.e., “aged friend” and “friend of long standing”, is not therefore a consequence of two different senses of *old*. What distinguishes the two readings is the fact that in the one case, *old* has as its Tr simply a “thing” (it is the thing as such that has endured over time), while in the other reading, the Tr is a thing *qua* participant in a relation (it is the thing characterized with respect to a relation that has endured). Strictly speaking, therefore, the ambiguity of *old friend* derives from the polysemy of *friend*, not from the polysemy of *old*.

(Taylor 1992: 15)

さらに、名詞を変えると例えば *an old colleague* には「元同僚 (a former colleague)」というさらに異なる synthetic meaning が生じる。これは2人の同僚のうちどちらかが例えば転職してその会社をやめてしまえばその同僚関係は終わり、その関係が終わっても2人は存在し、別の関係になっているかもしれないのだが、「同僚」としての状態は終わるということが原因で、この点で *an old friend* の場合とは少し異なる。

例えば *an old box* や *an old car* には synthetic meaning は生じないが、それは *box* や *car* が何か他のものとの関係における参与者として存在するとは考えにくいからである。しかし、所有格を付けて *my old car* とすると *car* が「私」との関係において存在するものと捉えられ、「私がかつて所有していた車」という synthetic meaning での解釈が可能になる (Taylor 1992: 25)。friend や colleague のような名詞が持つ、他との関係の中で参与者として存在する名詞の関係的性質を帯びるといえる。

old N の複数の解釈はその名詞句全体が何をトラジェクターとして持つのかによって生じるというのが Taylor (1992) の主張である。トラジェクターが単独で存在する個人やモノであれば absolute meaning の解釈が与えられるのに対し、ある関係における参与者をトラジェクターとして持てば「長い間の」「かつての」という synthetic meaning が生じる。どんな人やモノがトラジェクターで、形容詞が表す性質をトラジェクターのどこに見出して言語化するかが重要と思われるが、次節では、形容詞が表す性質に焦点を当てて考えてみる。

4. メトニミー認知に基づく形容詞の理解

形容詞は対象の一時的または恒常的な属性や性質を表すとよくいわれるが、2節でみた指示修飾の場合、例えば (5) の *cigarette* に *sad* という属性をみることはできない。また、指示物修飾と考えられるケースでも、例えば *a comfortable sofa* という場合の「快適さ」は、そのソファに触れたり座ったりしてその特徴を感じ取る知覚者の知覚行為が背景にあって初めて認識される属性である³⁾。対象の「属性」や「性質」とされるものは、篠原 (2002, 2008)、西村 (2002) が論じるように、知覚者と知覚対象の相互作用から生まれる「相互作用的性質」と考えるべきであろう。知覚者は、例えばある本の「難しい」という性質を、読むという行為を通じて知覚するわけだが、読んで本の難解さを知覚するという相互作用はいわばデフォルトであるため、あえて言語化しない傾向が高い (6 a)。しかし、言語化すること (6 b)、さらには知覚者と合わせて明示化すること (6 c) も可能である。

3) 仲本 (2006: 41) は、「重い」という概念は、その対象を「動かす」といった動作を背景にして、それを運ぶ等の行為に対する「抵抗力」として理解されるということを論じている。

- (6) a. This book is difficult.
 b. This book is difficult to read.
 c. This book is difficult for me to read.

篠原（2008）は、知覚者としての「私」を主語にとることができず（*私は[このバラが]赤い）知覚者の心のあり方として理解されることのない「丸い」「長い」「赤い」などの典型的情態形容詞についても、背後には「対象と知覚者との相互作用」が存在すると考える（篠原 2008：101）。「赤い」という特性は対象に内在する静的な性質と考えられることが多いが、篠原は「静的で安定しているのは、実は、知覚者の（判断の前提となる）知覚行為を含めた『知覚者と対象との関係』の方である」と述べる（篠原 2008：101）。対象を「赤い」と認識する知覚者と対象との相互作用に基づく関係が静的で安定しているのは、視覚という知覚行為の志向性と結果（判断）の安定性が要因である。「嬉しい」「なつかしい」といった情意形容詞について考えてみると、その形容詞が表す感情はどの対象に向けられたものであるか、また何が原因でどこにその感情を持つのか明らかでないことがあるが、視覚の観察対象は一定しており、対象に付着したもの（色）に目を向けて「赤い」というその特性を認知する。また、同じ経験をして「嬉しい」と感じる人もいればそう感じない人もいるのに対し、同じ対象を見て「赤い」と感じる人と「青い」と感じる人がいる状況は考えにくい。これらの安定性により、対象の「赤い」という性質は客観的で対象にもともと備わっているものであるかのように捉えられることになる。

以上のように篠原（2008）は、対象の性質や特徴と言われるものは、あらかじめ対象に内在しているのではなく、知覚者が対象に能動的に関わることを前提とする「相互作用の性質」であるとする。形容詞が表す対象の性質について同様の捉え方をする西村（2002）は、本に難しいという性質があるために、その本を読むという行為が困難であるという、対象と知覚者の知覚との間に因果関係が成立していると説明する。*it* を主語に持つ（7a）は行為の特性を焦点化するのに対し、（7b）のいわゆる *tough* 構文はこの本の特性を焦点化している。

- (7) a. It is difficult to read this book.
 b. This book is difficult to read. (西村 2002：305)

そして、この *difficult* の二つの意味は、因果関係に基づく換喩的な多義であると言う。

... *tough* 交替の根底には、難易や快不快に関する形容詞（または名詞）群の示す換喩的な多義性があると考えられるが、この換喩の基盤になっているのは、〈行為遂行の際に経験される難易度や快不快の程度（X）は、行為の対象、相手、場所などの特性（Y）によって決定される（ことが多い）〉という、行為の難易や快不快に関する一種のフレームである。（西村 2002：307）

フレームの中の異なる側面、つまり（7a）では X に、（7b）では Y に焦点を合わせているということで、換喩的な多義性ということができる。フレームの異なる側面に焦点を当てるということは、言い換えれば「同一の domain 内の profile 選択の差」（篠原 2002：268）である。西村（2002）の「因果関係」による説明は、対象に何らかの特性があり、知覚者が対象と関わってある行為を経てその特性を認めるということで、篠原（2008）の「相互作用の性質」とつながる。

篠原（2008）のいう「相互作用の性質」とはあらかじめ対象に内在しているものではなく、知覚者との相互作用から生じた知覚者の心身状態が対象の性質として認知されたものである（篠原 2008：98）。私たちが対象に何らかの性質を認める時、それは実は知覚者自身の心身状態を認知しているのである。尼ヶ崎（1990）は「壁紙音楽（ウォールペーパー・ミュージック）」という言いかたを例に挙げ、その音楽に見出すことのできる「壁紙らしさ」の認知とはまさに知覚者の心身状態の認知であると述べる。

「壁紙音楽」の場合を例に考えてみよう。この音楽の「らしさ」の特徴を、仮に言葉で羅列すればどうなるだろう。「甘い」「快適」「穏やか」「明るい」「軽い」「きれい」「単調」「刺激的でない」「緊張させない」「邪魔

にならない」等々。ここで「きれい」という美的判断を表す用語はいささか面倒なので除外して（本当はその必要はないと思うが）、もう一度これらの評価語をよく見てほしい。これらの言葉は、一見対象の特徴を形容しているように見えながら、実は私自身の経験の特徴を語っているのではあるまいか。いや、まさにそうである。私が「壁紙音楽」に見出した〈壁紙らしさ〉とは空間に包みこまれた抱擁感、適度にきれいな快適さ、神経を刺激しない安楽さなど、ほかならぬ私自身の心身のある状態なのである。とすれば、「らしさ」の認知とは、対象に属する特徴の認知というより、それを経験している私たちの心身の状態の認知にほかならない。（尼ヶ崎 1990: 118）

この引用を踏まえて 2 節の (5) で挙げた *a sad cigarette* を考えると、煙草を吸っているその人を見て話し手が感じた物悲しさやわびしさなど、話し手の心身の状態を語っているということがいえる。

形容詞が表す、対象の特徴と思われるものは、実は知覚者の経験や心身状態の特徴である。この考え方を踏まえて、例として *quick* を用いる AN の例を見てみよう。

- (8) a. She walked with short, **quick** steps.
 b. What's the **quickest** way to the station?
 c. We need a **quick** response from the government.
 d. I had to make a **quick** decision.
 e. We stopped to have a **quick** look at the church.
 f. She's a **quick** learner.

(すべて LDCE)

全ての例において、知覚者が感じる「はやさ」（上記の X）は対象の「はやい」という性質（同 Y）に起因するという因果関係が成立する。(8 a) は対象の性質を焦点化している（プロファイルしている）ことが比較的わかりやすい例であろう。歩の進め方が目に見える形で存在するので明確で、多くの人がそれを見て「はやい」と感じるという点で安定的であり、その特性が *steps* に内在している静的で客観的なもののように感じられる。(8 b) はもちろんその道に「はやい」という特性が存在するわけではない。私たちが実際に移動してみたり他の経路と比べてみたりして「駅まではやく行ける」と感じるのである。(8 c-e) は対象が出来事の場合であるが、一連のプロセスを経て、それを「はやい」と認識する知覚者の存在が不可欠である。(f) はいわゆる動作主名詞化形の例で、「彼女」の理解や飲み込みがはやいことを概念化者が捉えて言語化している。

以上はあるモノや出来事が知覚の対象であり、その対象と知覚者との相互作用によって「はやい」という性質が認知される事例である。これに対して以下の例は、一連の出来事の中のあるモノがプロファイルされている、興味深い例である。

- (9) a. Have we got time for a **quick** drink? (LDCE)
 b. I stopped in Perry's for a **quick** crab. [dish of crab meat that could be consumed quickly] (Clark 1983: 306)
 c. Could I have a **quick** word? (CIDE)

(9 a) と (9 b)⁴⁾ は店の飲食物の出され方または消費のされ方を「はやい」と特徴づけている。(9 c) については (8 c~e) のように出来事全体をプロファイルして **a quick talk* とする方が適切のように思われるが、そうではなく交わされる「ことば」に「はやい」という特性を見出して言語化しているのである。

quick の反意語の *slow* の例を見てみる。

4) 自然言語に遍在するにも関わらず、伝統的なパーサ（構文分析器）ではうまく解析できない「その場限りの意味（nonce sense）」を持つ contextual expressions の例として Clark (1983) が出した例である。

- (10) a. Take a deep, **slow** breath.
 b. The company is experiencing **slow** sales.
 c. Teaching assistants have time to help **slower** pupils.
 d. a **slow** handclap
 e. a **slow** oven
 f. a **slow** lane

(すべて LDCE)

全て対象を *slow* と知覚する知覚者の心身状態を、対象の性質として捉え直したものであるが、名詞との組み合わせにより少しずつ異なる意味が生じている。それぞれ「速度がゆっくりの呼吸」「(客が少なく) 増えるのが遅い売上数」「理解が遅い生徒」「(不賛成を表すための) ゆっくりとしたまばらな拍手」「温度が低く、調理がゆっくりのオープン」「ゆっくり走る車両のためのレーン」と解釈される。

これまでの例で明らかなように、形容詞と名詞の組み合わせで AN には多様な意味が生じ、全体の意味を単純な部分の総和とすることはできない。篠原 (2002: 272) は「我々は形容詞を限定した意味で用いているだけでなく、形容詞の意味と後続の名詞の意味が整合するように、百科事典的知識を用いて関連する領域を探し出し、微妙に変化させている」と説明し、以下の例を挙げている。

- (11) a. *topless* dress
 b. *topless* waitress
 c. *topless* bar
 d. *topless* district
 (12) a. *healthy* body
 b. *healthy* exercise
 (13) a. *handicapped* person
 b. *handicapped* parking
 (14) a. *pregnant* woman
 b. *pregnant* tray⁵⁾

(篠原 2002: 271)

例えば (12 a) は「健康な (体)」であるのに対し (12 b) は「健康な体を作ることを目的とした (運動)」のことであるが、私たちは *healthy* という形容詞がそれぞれの名詞の意味に合うように、意味を変化させて柔軟な理解をしている。言語化する側からいえば、健康な体を作ることを目的としてある種の運動、食事、生活スタイルなどが存在するわけだが、私たちはそのフレームの中の、意味が整合する部分に *healthy* という形容詞をつけて *healthy exercise, diet, meal, eating, lifestyle* などの表現を生み出している。

5. 結 語

AN の意味をパラフレーズしようとするとき非常に複雑であるか時には不可能なことさえあり、意味の分析には各構成素である形容詞・名詞の意味とそれらの間の関係を考慮に入れる必要がある。4 節で論じたように、形容詞が表す対象の性質といわれるものは、知覚者が対象との相互作用によって経験した心身の状態を述べた「相互作用的性質」である。例として *quick* N を見たが、知覚者の「はやい」という体感がベースにあるのは共通しているが、出来事のフレームの中のどこを拾い上げて *quick* という形容詞をつけて言語化しているかという点に違いが見られる。概念化者は名詞で表される対象や出来事、または出来事の中の一要素の有り様を「はやい」と認知しており、形容詞 *quick* の多義性は換喩的なものとして捉えられる。

5) これは「妊娠した女性が食事をするトレイだから、たくさん盛ってくれ」というリクエストの中で使われた例とされるが、(3) の *a sick room* のような、複合名詞と同程度の意味の圧縮度を有する表現である。

また、事象のある部分を切り取ってそこに概念化者の体感や心身のあり方を表す形容詞をつけて言語化することがこれほどに遍在するのは、英語が名詞表現を好む言語であるということにも起因しているといえる。結果として形容詞、そして AN の多義性が生じることになる。

参 考 文 献

- 尼ヶ崎彬. (1990) 『ことばと身体』 勁草書房.
- Bolinger, Dwight. (1967) "Adjectives in English: Attribution and Predication," *Lingua* 18, 1-34.
- Clark, Herbert H. (1983) "Making Sense of Nonce Sense," G. B. Flores d'Arcais and R. J. Jarvella (eds.), *The Process of Language Understanding*, 297-331.
- Givón, Talmy. (1970) "Notes on the Semantic Structure of English Adjectives," *Language* 46(4), 816-837.
- Jespersen, Otto. (1961, 1965) *A Modern English Grammar on Historical Principles Part II*, George Allen & Unwin.
- 仲本康一郎. (2006) 「属性の意味論と活動の文脈－椅子が荷物になるとき－」 大阪外国語大学日本語日本文化教育センター『日本語・日本文化』32号, 39-60.
- 西村義樹. (2002) 「換喩と文法現象」西村義樹（編）『認知言語学Ⅰ：事象構造』東京大学出版会, 285-311.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and J. Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.
- 斎藤武生・鈴木英一. (1984) 『冠詞・形容詞・副詞（講座・学校英文法の基礎3）』研究社出版.
- 篠原俊吾. (2002) 「『悲しさ』『さびしさ』はどこにあるのか：形容詞文の事態把握とその中核をめぐって」西村義樹（編）『認知言語学Ⅰ：事象構造』東京大学出版会, 261-284
- . (2008) 「相互作用と形容詞」森雄一・西村義樹・山田進・米山三明（編）『ことばのダイナミズム』くろしお出版, 89-104.
- Sweetser, Eve. (1999) "Compositionality and blending: semantic composition in a cognitively realistic framework," Janssen, Theo and Gisela Redeker (eds.), *Cognitive Linguistics: Foundations, Scope, and Methodology*, 129-162.
- Taylor, John R. (1992) "Old Problems: Adjectives in Cognitive Grammar," *Cognitive Linguistics* 3-1, 1-35.
- Vendler, Zeno. (1968) *Adjectives and Nominalizations*, Mouton.
- 安井稔・秋山怜・中村捷. (1976) 『形容詞（現代の英文法7）』研究社出版.

例文出典

CIDE: *Cambridge International Dictionary of English*, 1995

LDCE: *Longman Dictionary of Contemporary English*, Fourth Edition, 2005